

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修3歳児・第2回）

「子どもの発達と保育者の関わり」

～3歳児にとってあそび込むとは～

日時：令和6年7月5日（金）15:00～17:00

会場：足立区生涯学習センター

講師：東京都立大学 准教授 田中 浩司 氏



映像を通して「ごっこ遊び」の中に見えてくる3歳児の世界について学びました。

事例①

園庭にゴザを敷き、遊びの場をつくる。

場を共有しているが、複数のイメージが交差している。

温泉ごっこと赤ちゃんごっこが混在している。

ごっこ遊びをする様子を離れたところからみている児。時々楽しさを体で表現し踊ったり、笑ったりしている。



ごっこ遊びをしていた子どもが、ふっと遊びの外に出て、別の遊びを楽しんで、また戻ってくる。



子どもたちは、あいまいさの中でつながっている

3歳児のごっこ遊びは、行ったり来たりしながら、緩やかな世界が広がっている。

このような穏やかなつながりから、子どもたちは安心感や居心地の良さを感じている。

ごっこ遊びの様子を少し離れたところから見ている児は、緩やかな世界に憧れている存在である。

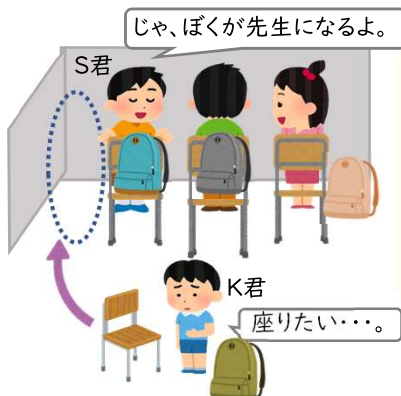
保育者は、無理に子どもたちの中に誘わずに、「入りたいのかもしれないな」という思いで構えていることが大切である。

事例②

兄弟の運動会を見たことをきっかけに、始まった学校ごっこ。

身近な道具（リュックサック）を使って楽しんでいる。

入れて欲しいK君となかなか入れてくれない子どもたちの姿が見られる。



自分達の境界をつくる姿があるが、一緒に遊びたい気持ちは、みんなもっている



S君は、「じゃ、ぼくが先生になるよ」と友達の入りたい気持ちになんとか応えようとしている。



K君は隙間に入りたい。ごっこ遊びに入れてもらえないと感じている。S君の気持ちに気付いていない。



このような場面での保育者の関わりをどのようにもつか？



保育者は、譲ってくれた児に対して、「ありがとう」と伝えてしまうことが多い。

一緒に遊びたいと思っている児に対し「先生に褒められるために譲る」という目的に変わってしまうこともある。**譲ること、入れてあげることだけが目標ではない。**

子どもたちの遊びが変わってしまいそうな時に関わっていく。

事例 ③

砂場での3人のやりとり。普段何かとぶつかり合うことの多いK君とZ君。その間をつなぐA君は二人に気を使っているわけでもなく、一緒に遊びたいという思いをもって自然体で間に入っている。

K君とA君の会話

イメージのずれ

Z君の様子を見て「もっと水入れる?」とZ君の使っている皿に水鉄砲で水を入れ始める。

A君とZ君 「おばけみたいだね」

K君 「A君まだできてないよ」

A君 「うん」

A君 「これもおばけ?」

K君 「もうないの?」

A君 「うん」

しばらくZ君の皿にA君が水を入れている。

K君 「ねえ、もうないの?」とA君に水鉄砲の水があるか確認する。

A君とZ君 「ない」

A君は残りの水をK君、Z君二人の皿に入れて水道に水を取りに行く。

K君とZ君が二人になった時に

K君 「ちょっとこれちっちゃいね」

Z君 「あとでこれハッピーバースデーなの」

などと会話している。



ポイント

仲間をつないでいく

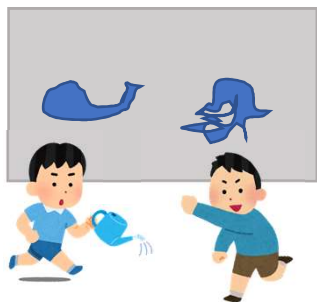
3歳児は、まだまだ相手の気持ちが分からないことが多い。

また、相手のイメージもなかなか伝わりにくい。

保育者は、相手の友達も同じように楽しんでいることや周りの子がいいね!と感じていることなど積極的に伝え、心が動く経験を通してイメージが共有していけるように関わっていく。

事例 ④

子どもたちが、ジョウロや皿に水を入れて、コンクリートの壁に模様を描き始め、花火やタコに見立てて。ジョウロで模様を描こうとする児や、ダイナミックに水をかける児がいる。



ポイント

豊かな生活経験と遊びがつながっている

タコを描く姿は、以前年長クラスの子どもたちが呼びかけてくれた夏まつりで魚釣りをやったことがあるため、間接的に遊びに取り込んでいる。

同じ経験があるからこそイメージが重なり合い、楽しかった経験を振り返る機会にもなっている。

ポイント

相手を受け入れて遊ぶ

「クジラをつくる」とジョウロで模様を描き始めた児に対して、ダイナミックに水をかける児は、友達に水がかかってしまうほど…。初めは、「やめてよ」と言っていた児だが自然と相手を受け入れ、一緒に遊ぶ姿が見られる。

グループ討議

『相手の気持ちがなかなか受け止められない子どもの育ちをどのように支えるか?』

その子を含め、子どもたちとスキンシップを図っている。マイナスイメージがつかないように声をかけて仲裁している。

認めてほしい気持ちを大切に、そばについて話をする機会をもっている。



泣いている時は、落ち着くまで待つ。自分から話し出すのを待って対応している。

異年齢児と過ごしている時は4、5歳児を交えて話し合いをするようにしている。



*子どもがほんの少しだけ「譲歩する」瞬間を見逃さずに読み取る。

*子どもには、どんな姿を見せてほしいのか、どう育ってほしいのかを職員同士で共有する。

*周りの子どもたちへ向けてさりげない発信をしながら、関係性をつなげていく。

研修生の報告書より

子どもたちにとって、「遊びの枠が定まっていない、行ったり来たりできる空間」が、とても居心地の良い場所であることに気が付いた。子どもたちの何かをやってあげようとする姿が、大人の「ありがとう」のためならば、それは、本来の遊びの中で子どもたちが感じる「やりたい」「してあげたい」気持ちとは違ってしまうことを学んだ。

トラブル以外で大人がどう関わっていくかという話は興味深かった。相手の気持ちを受け入れなかった子が、ほんの少し譲歩した時の瞬間を見逃さず読み取ることや保育者間で共有したい子どもの姿のポイントは、保育の中で自分自身が大事にしていることだと聞いて、今後も丁寧に関わりについて考えていきたいと思った。